【341】

氏　名（本籍）	土屋伸夫（栃木県）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 4804 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**デザインギャラリー銀座・松屋の研究** －デザインギャラリー展の理念とその運営－

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	齊藤泰嘉
副　査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	直江俊雄
副　査	筑波大学教授	博士（感性科学）	山中敏正

論文の内容の要旨

本論文は，デザインギャラリー銀座・松屋を展示空間として日本デザインコミッティー（JDC）が開催した企画展のうち，第 1 回から第 600 回までをデータベース化して分類整理し，それらの展覧会における理念や運営の特質を解明することを主たる目的としている。そうした課題設定の背景には，これまでに戦後日本デザイン史研究において，デザインギャラリー銀座・松屋の果たした役割の解明に必要な客観的分析が，必ずしも十分にはなされてこなかったという研究状況がある。

研究対象となっているのは，主に次の二つである。第 1 は，デザインギャラリー銀座・松屋が 1964（昭和 39）年 5 月に開催した第 1 回企画展から 2003（平成 15）年 10 月に開催した第 600 回企画展までの 600 本の展覧会の出品内容である。第 2 は，これらの企画展の実施を担当した者のうち，3 名の日本デザインコミッティー理事長，すなわち，勝見勝（1909 ～ 1983 年），清家清（1918 ～ 2005 年），亀倉雄策（1915 ～ 1997 年）である。

研究方法は，文献調査とデータベース作成（600 本の展覧会），さらに日本デザインコミッティーの関係者である永井一正（1929 年～）前理事長，川上元美（1940 年～）現理事長，藤野与志隆（1928 年～）元松屋グッドデザインコーナー担当社員，水野かほる前事務局長，土田真理子現事務局長らへのインタビューを通じてデザインギャラリー銀座・松屋に関する事実関係を整理し，これを芸術支援学の観点から分析するというものである。

本論文は，以上の研究目的，対象と方法をもとに全 4 章からなる。第 1 章は，「デザインギャラリーの黎明」と題し，デザインギャラリーとは何かを定義付けた後，歴史的な考察を行い，資生堂ギャラリーの沿革と展覧会について述べている。論文著者によれば，デザインギャラリーとは，グラフィックデザイン・プロダクトデザイン・インテリアデザインなどの企画展を行う場でぁり，原則的にはコレクションを持たないで，企業や団体による無料公開（貸画廊での開催も含めた）という社会貢献の場である。それは，企業メセナ（芸術文化支援）そのものであり，特にデザインの啓蒙を主眼としている。また，論文著者は，資生堂ギャラリーの活動は，資生堂の企業としての在り方に大きな影響を与え，資生堂は日本における企業の文化支援の先駆

ともいえるが，むしろ企業が文化支援によってどれほど豊かになれるかという見本がここにあると指摘している。第2章は，「デザインギャラリー銀座・松屋の理念と沿革」と題し，その運営理念について触れた後，その創設の由来についてさかのぼり，松屋・銀座とグッドデザインコーナー，日本デザインコミッティーとグッドデザイン運動について事実関係を整理している。論文著者は，1954（昭和29）年，日本で初のグッドデザイン運動が，銀座松屋7階売り場に「グッドデザインセレクション」という小さなスペースから始まり，そのセクションを，国際デザインコミッティーが引き継いだのがその起源であるとしている。第3章は，「歴代理事長とデザインギャラリー展」である。第1節は勝見勝が企画したデザインギャラリー展の特色，以下同様に第2節は清家清が企画したデザインギャラリー展の特色，第3節は亀倉雄策が企画したデザインギャラリー展の特色である。特に勝見勝が企画したデザインギャラリー展については，詳細な分析を行っており，その特色は，第一に，メディアと密接な関係を持っていたこと，第二に，独創性・総合性・学際性を持つ企画であったこと，第三に，国際性があったことを指摘している。第4章は，「デザインギャラリー展の役割とその評価」と題し，第1節データベースの概要，第2節データベースの分析方法，第3節データベースの芸術支援学的分析，第4節デザインギャラリー展の役割とその評価という内容になっている。以上が，本論文の構成である。

デザインギャラリー銀座・松屋において日本デザインコミッティー（JDC）が開催した企画展のうち第1回から第600回までをデータベース化して分類整理し，それらの展覧会における理念や運営の特質を解明するという本研究の目的に関し，以上の考察から得られた結果は，主に以下のとおりである。①デザインギャラリー銀座・松屋の企画展は1964（昭和39）年開催以来，すでに44年を迎え，戦後の1950年代からの活力を媒介に「デザインの啓蒙」を実践し，文化としてのデザイン発信に繋がる文化装置の重要な役割を担い，今日のデザインギャラリー環境の飛躍の礎となっている。②デザインギャラリー銀座･松屋が，デザインギャラリーの目的である「デザインの啓蒙」と同時に，目的のひとつである「デザインの流通」を支援してきたことは，デザインの持つ社会性をよく表わしている。③デザインギャラリー銀座・松屋で開催された企画展は，デザインギャラリーの定義に示した，企業や団体による（貸画廊での開催も含めた）無料公開の社会活動および社会貢献の場を体現した，長期に亘って活動してきた日本のデザイン史における水先案内役を担っている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

1950年代以降，日本の戦後復興や経済成長と並行して日本のデザインは国際的な評価を勝ち得てきた。その歴史的発展過程や特色を解明する上で，デザインギャラリー銀座・松屋での企画展は，時代の証言者として重要な役割を果たしてきた。だが，このギャラリーに関する本格的研究は，未着手のままであった。そのような中で，本研究は先駆的であり独創性も高い。また，企画展データベースの構築とその芸術支援学的分析は，今後の戦後デザイン史研究に飛躍をもたらすものとして期待できる。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。